

平成 21 年 6 月 8 日現在

研究種目：若手研究 (B)  
研究期間：2006 ～ 2008  
課題番号：18720203  
研究課題名 (和文) 元首政期ローマ帝国の変容と西アジア

研究課題名 (英文) Roman Empire and the East

## 研究代表者

桑山 由文 (KUWAYAMA TADAFUMI)  
京都女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：60343266

研究成果の概要：ローマ元首政期の西アジアは、文化的中心であるギリシア本土と、政治的中心であるローマ帝国中央との狭間に位置した。このような文化的政治的周縁性ゆえに、西アジア出身の元老院議員やギリシア知識人たちは、ギリシアとローマ双方への帰属意識を有し、帝国中央とギリシア文化とを結びつけることとなった。このような状況が、西ローマ帝国滅亡後も、東部が「ローマ帝国」として存続する文化的根拠を生み出していったのである。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	210,000	3,010,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ローマ史

## 1. 研究開始当初の背景

前 1 世紀から後 3 世紀にかけて、元首政期ローマ帝国が変容していった過程において、西アジアは大きな役割を果たし

た。しかし、日本国内においては、ローマ元首政期の西アジアを扱った研究は皆無に近い。古代ギリシアやヘレニズム時代まではこの地域は十分に研究されている。だが、ローマ支配下で政治的独立を失った前 1 世紀末以降のこの地域の歴史

は、ギリシア史の範疇とは考えられず、一方ローマ史研究者の関心はイタリアなどヨーロッパに集中するため、その意義は見過ごされてきていた。また、国外では、被支配者としての西アジア社会の立場を強調するものが大半であり、ローマ帝国自体の変容にまで踏み込んで議論したものは少ない。

そこで、本研究課題は、政治史、文化史など多様な側面から検討することで、このようなびつな研究状況の問題を解決し、この時代の西アジア社会がローマ帝国に与えた影響をより明確に析出することを意図した。

## 2. 研究の目的

ローマ帝国支配下の諸地域の中で、小アジア、シリアなどの西アジアは他と異なる独自の世界を形成していた。ユダヤ文化などの土着文化に加えてギリシア文化が普及し、ローマより古い多様な文化的伝統を誇り、西方のラテン文化圏とは一線を画す存在であった。また、南、東アジアとの交流の玄関口として東西交易で繁栄した地域でもあった。

この文化的に先進、経済的にも富裕な地域をローマが支配したことは、支配側ローマおよび支配される側の西アジア双方に重大な影響を与えていった。西アジア社会がローマ帝国行政機構に組み込まれてローマ皇帝の存在が人々の意識に明確に刻み込まれ、彼らのアイデンティティは、ギリシア的要素、ローマ的要素、それらより前の西アジア的要素が混交した重層的なものとなった。さらに、こうした人々の中央政界への参画により、帝国中枢もまた姿を変え、その重心は東方へと移動することとなった。すなわち、西アジアを取り込んだことがローマ帝国そのものを変容させ、以後の地中海世界の史的展開を大きく決定づけたのである。以上のような構想の下で

本研究課題は、ローマ帝国が西アジア社会と本格的に交わり始めた元首政期（前1世紀末～後3世紀）、とりわけ西アジアの人々が帝国中枢で大きな役割を果たし出す後2世紀末から3世紀初頭を中心に、変容の実相を解き明かすことを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) ローマ元首政期の西アジアを、属州史、地域史の対象としてではなく、ローマ帝国統治構造や中央政界をも視野に入れた、幅広い視点から考察した。

(2) 古典期ギリシアの模倣にすぎないとして現代の歴史家が軽視しがちな後1～3世紀のギリシア作家（その多くは西アジア出身）とその作品に重点を置き、これらを、当該社会を反映するものとして新たに捉えなおし、主史料として使用した。

(3) 具体的考察対象としては西アジア諸都市のエリート層に注目した。彼らがギリシア本土や首都ローマとの間にいかなる関係を築き、どのような心性を有したのかを軸として研究を進めた。

## 4. 研究成果

(1) 西アジアはヘレニズム時代以来、ギリシア文化圏に組み込まれていたが、ローマ帝国が東地中海へ進出して以降、政治的にはその支配下に入った。すなわち、この地域は、ローマ元首政期には、ギリシアとローマという二つの世界に属していたのである。

それでは、文化的中心であるギリシア本土と、政治的中心であるローマ帝国中央との間で、西アジアとその社会は、いかなる位置に

あり、ローマ帝国の史的変遷にどのような影響を与えることとなったのか。本研究課題の問題意識は、この点を解き明かすことにあった。

(2) このような問題意識を反映させ、本研究課題の枠組を提示した論文が、*‘Greek Elites during the Early Roman Empire: The Sense of Identity of the Senators from the Greek East’* (*KODAI Journal of Ancient History*, 13/14, 2007, pp. 151-156) である。この論文では、小アジアやシリアの人々がどのような心性を有したのかを考察し、ギリシア文化圏では一段低く見られていた彼らが、文化的中心とされていたギリシア本土に対する独特の文化的劣等感を抱いていたこと、その意識こそが、彼らをローマ帝国中央への進出へと向かわせていったという、西アジアの独自性を明らかにした。本研究課題は、この論考執筆の過程で得られた成果を出発点として、以後考察を深めていった。

(3) 西アジア、ギリシア、ローマという三つの世界のいずれにも深く関わった人物にガイウス・ユリウス・アンティオクス・フィロパップスがいる。彼は西アジアのコンマゲネ王国の王族であり、同時に、アテネのアルコンローマのコンスルにも就任した。本研究課題は、次に彼を考察対象として取り上げ、後 1 世紀から 2 世紀にかけてのローマ帝国の変容を理解することを試みた。その成果の一部を活字化したものが、論文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容 — 東部出身元老院議員の台頭とアテナイ」（笠谷和比古編『公家と武家 IV 官僚制と封建制の比較文明史的考察』所収、2008 年 3 月）である。従来、アテネの地方有力者にすぎないと見なされていたフィロパップスが、実は、ロ

ーマ帝国中央に軸足を置きつつ、アテネに本格的に関わっていった最初の人物であったことを析出し、彼をはじめとする西アジア出身元老院議員たちが中心となって、ギリシア本土とローマ帝国とを結びつけていったことを指摘した。すなわち、ローマ帝国が、西アジア世界とギリシア文化圏を本格的に取り込み東方へと政治的文化的重心を動かしていく端緒となったのが、東部出身元老院議員の台頭だったことを明らかにした。フィロパップスを扱った論考は国内にはない。国外のものも数は少なく、またアテネでの彼の位置に議論が限定されてしまっている。本研究課題のようにフィロパップスや西アジア王家出身者を取り上げ、ローマ帝国の「ギリシア化」という文脈でその史的意義を論じているわけではない。

(4) こうした元老院議員身分を中心とする研究を進めていくのと同時に、帝国政治支配層第二身分である騎士身分に関して、西アジア知識人層との関係に着目しつつ、検討していった。その成果の一部は、論文「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」（京都女子大学史学会『史窓』2008 年 3 月）に反映されている。この論文では、ローマ帝国における皇帝官房長官職の一つであったギリシア語書簡長官職を取り上げ、この職務に登用されたギリシア文化圏の知識人層の実態を分析した。

従来、ギリシア語書簡長官職は、騎士身分官僚体系中の一公職としてしか論じられてこず、他の多くの騎士身分公職と同じ性格を有したのだと、無批判に考えられてきた。しかし、本研究は、ギリシア文化圏とのつながりという側面からこの職務を捉え直すことで、従来の認識を大きく変えることができた。

すなわち、ギリシア語書簡長官職に登用された人々について、本研究代表者がプロソポ

グラフィ的手法を使用して検討した結果、この職務が、騎士身分昇進階梯から外れた異色の存在であったこと、ギリシア文化を熟知した者を登用して、帝国の東部行政を円滑化するべく設けられた専門職であり、それゆえにギリシア知識人がもっとも就任を熱望するものとなっていたことが明らかとなったのである。

この論文の成果を踏まえて、さらに研究を深化させていった結果、次のような認識を得ることができた。ギリシア語書簡長官職などの帝国公職は、しばしば先行研究によって、一種の「ローマ化」、つまり、それらの職務就任者をローマ社会に組み込んでいくという性格が強いとみなされてきたのであるが、実際にはその逆であり、むしろ、彼らはギリシア的価値観を維持しつつローマ帝国公職に就任したのであった。特に西アジアの知識人層にとっては、こうした職務は、ギリシア本土に対する文化的劣等感を解消させる「装置」として機能することともなった。こうして、ローマ帝国は、ローマ的価値観ではなく、ギリシア的伝統を有した人々を政治中枢に受け入れていくこととなり、後 5 世紀の西ローマ帝国滅亡後も東部が「ローマ帝国」として存続する文化的根拠が形成されていったのである。

(5) 以上のように、ローマ帝国中央の政治支配層である元老院議員、騎士身分と、西アジアの地方有力者や知識人層とを結びつけることで、本研究課題は、ローマ元首政期の西アジアが有した意義を政治史的・文化史的観点から明らかにすることができた。とりわけ、西アジアの知識人層をギリシア本土の人々と区別して捉えることで、彼らの心性の独自性を浮彫りにしたこと、および彼らの史的意義を帝国中央政治との関係から明確にしたことが

本研究課題の成果の大きな特徴である。

このような視点に立った研究は、既に言及したように、国内では皆無である。また、欧米諸国においては、ローマ帝国と西アジアとの関係は、近年注目されてきてはいるが、政治史的観点は考慮されることが少なく、またギリシア文化圏におけるその周縁性が問題とされることもない。その意味で、本研究課題は、元首政期ローマ帝国における西アジアについて、従来とは大きく異なる新たな像を提出することができたといえよう。

(6) この結果、新たに浮かび上がってきた問題は、元首政期ローマ帝国におけるギリシア本土の位置づけである。中でも、ギリシア文化圏の中心的存在であり、後 2 世紀にはローマ帝国の「文化首都」的役割を果たすこととなったアテナイについては、本研究課題でも西アジアとの関係を中心に時期を限定して検討はしたが、元首政期全体をおさえた長期的視点からの分析はできなかった。今後の課題である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 3 件)

① 桑山由文「元首政期ローマ帝国におけるギリシア世界の変容 — 東部出身元老院議員の台頭とアテナイ —」 笠谷和比古編『公家と武家 IV 官僚制と封建制の比較文明的考察』所収、2008年、pp. 418-445。(査読無。依頼論文)

② 桑山由文「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」『史窓』(京都女子大学史学会)

65, 2008年, pp. 19-32。(査読無)

③ Tadafumi Kuwayama, 'Greek Elites during the Early Roman Empire: The Sense of Identity of the Senators from the Greek East', *KODAI Journal of Ancient History*, 13/14, 2007, pp. 151-156. (査読無。依頼論文)

〔学会発表〕 (計1件)

① 桑山由文 「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」 第 74 回西洋史読書会大会, 2006年 11 月 3 日, 京都大学。

〔図書〕 (計2件)

① アエリウス・スパルティアヌス他著, 井上文則, 桑山由文共訳 『ローマ皇帝群像 3』 京都大学学術出版会, 2009 年。

② アエリウス・スパルティアヌス他著, 桑山由文, 井上文則, 南川高志共訳 『ローマ皇帝群像 2』 京都大学学術出版会, 2006 年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

桑山 由文 (KUWAYAMA TADAFUMI)

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号: 60343266